

参考資料

1. 庁舎と街並みの調和

● 現本庁舎を中心とした新庁舎計画

- ・ 昭和2年に北但大震災の復興の象徴として建築され、80年以上もの間市民に親しまれてきた「現本庁舎」を市民活動の拠点として保存活用することで、今後も庁舎が市民の記憶に残っていく計画とします。現本庁舎は前方に曳家しますが、大開通りから見て圧迫感のない配置とし、後方に新庁舎を計画することで、現本庁舎を新しい庁舎のシンボルとし、北但大震災の復興建築群との一体的な地域景観を創出します。

2. 現本庁舎と新庁舎の調和

● 現本庁舎と調和するデザイン

- ・ 新庁舎の配置・平面構成、外観デザインは、現本庁舎にならい、シンメトリー(左右対称)な計画とし、現本庁舎と新庁舎の調和を生み出します。
- ・ 新庁舎低層部のデザインは、現本庁舎2階部分のコーニス(軒蛇腹)と高さを揃えることで、新旧庁舎の一体感を生み出す計画とします。
- ・ 新庁舎は、市民の愛着のある現本庁舎を引き立てるよう、シンプルで、明るく、風格のあるデザインとします。

3. 災害対策への配慮

● 地震への対応

- ・ 地震に対する安全性を高めるとともに、災害対策本部としての初動体制を確保できるよう新庁舎、現本庁舎とも基礎免震構造とし、新庁舎は免震構造との相性も考慮したRC(鉄筋コンクリート)造とします。

● 浸水対策(二重三重の対策)

- ・ 新庁舎の1階床レベルは、現本庁舎の1階床レベルよりも10cm程度高くし、平成16年の台風23号レベルの水害においても室内への浸水防止を図ります。
- ・ 防潮板を設置し、浸水防止を図ります。
- ・ 防災マップによる想定浸水深に対応するため、1階以下の水没を想定し、庁舎の機能維持に不可欠な電気室、発電機室、電算室、上水受水槽・ポンプ室など主要設備室は2階以上に配置します。

● 防災拠点機能の充実

- ・ 市長室は、災害対策室や防災課とともに3階に配置し、防災中枢機能の充実を図ります。

4. 環境への配慮

●ライフサイクルCO2の削減

- ・CASBEE（キャスビー）-Sランクを目指し、グリーン庁舎として設計・建設・管理にいたるまで、地球環境に配慮した計画とします。

※ CASBEE（キャスビー）-Sランク：(財)建築環境・省エネルギー機構による認証制度で建築物総合環境性能評価システムによる環境評価。約90の評価項目をレベル1～5で評価し、総合的に算出した「建築物の環境性能効率」をSランク（素晴らしい）、Aランク（大変良い）、B+ランク（良い）、B-ランク（やや劣る）、Cランク（劣る）の5段階で格付けを行う。

- ・（構造）自然通風・換気・採光、アウトフレームによる日射抑制

（設備）太陽光発電、ペレットボイラ、

地熱（地盤沈下対策として地下水を利用しないため融雪等に利用）

- （その他）人感センサー（トイレ等の照明、水道の蛇口）、LED照明（必要照度に応じて）、

高断熱・高気密のペアガラス・Low-eガラス、日射抑制ルーバー（大型ガラス窓用）、

雨水利用（トイレ）

などの様々な環境配慮技術の導入により、ライフサイクルCO2の削減に努めます。

●豊岡市の気候を踏まえた環境配慮技術

- ・積雪地で寒暖の差の大きな豊岡市の気候を配慮し、吹抜けの待合ロビーには床放射冷暖房、事務室には床吹出空調といった居住域空調を行い、快適な環境づくりを行います。
- ・新庁舎に導入する様々な環境配慮技術を視覚的に掲示し、市民に環境への取り組み姿勢を啓発できる計画とします。

5. ライフサイクルコストの低減

●建設コストの縮減

- ・均等スパン・階高とし、施工部材の標準化を図ります。
- ・サッシュ、エレベーター、設備機器は極力、汎用品・規格品を採用し、低コスト化・高品質化を図ります。

●フレキシビリティによる長寿命化

- ・各階の事務室空間をオープンフロア化することで、将来の機構改革や配置換えに柔軟に対応できる計画とします。

●維持管理費の縮減

- ・構造体と二次部材を分離し、更新スペースも確保することで、改修・更新が容易な計画とします。
- ・建物内部やバルコニーから窓ガラスの清掃が行える計画とします。

●光熱水費の縮減

- ・外壁の高断熱・高気密化やペアガラスの採用により、外部からの熱負荷を軽減します。
- ・節水器具の採用により水の使用量を低減し、雨水をトイレ洗浄水などに利用し、上水使用量を削減。
- ・事務室は照度センサーによる昼光利用、トイレ・廊下などは人感センサーによる減灯・消灯制御を行い、照明エネルギー消費を削減します。